

開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ 上で定義された一回連続微分可能な複素数値関数が、解析的あるいは正則であることの定義をし、解析関数全体の集合が可換環(可換代数)になることを示した。次に、解析関数の解析写像による引き戻しが解析的になることを示した。

1 複素多変数関数の基本的性質

1.1 準備

$\mathbb{C}^n (\cong \mathbb{R}^{2n})$ の複素座標と複素共役を

$$z_j = x_{2j-1} + \sqrt{-1}x_{2j}, \quad \bar{z}_j = x_{2j-1} - \sqrt{-1}x_{2j} \quad (1 \leq j \leq n)$$

と表示することにする。 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ を開集合とし、 $u \in C^1(\Omega)$ とする。 u の微分 du は

$$du = \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial z_j} dz_j + \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial \bar{z}_j} d\bar{z}_j$$

と表すことができる。ただし、

$$\frac{\partial u}{\partial z_j} = \frac{1}{2} \left(\frac{\partial u}{\partial x_{2j-1}} - \sqrt{-1} \frac{\partial u}{\partial x_{2j}} \right), \quad \frac{\partial u}{\partial \bar{z}_j} = \frac{1}{2} \left(\frac{\partial u}{\partial x_{2j-1}} + \sqrt{-1} \frac{\partial u}{\partial x_{2j}} \right) \quad (1 \leq j \leq n)$$

いま、

$$\partial u = \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial z_j} dz_j, \quad \bar{\partial} u = \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial \bar{z}_j} d\bar{z}_j$$

とおけば、

$$du = \partial u + \bar{\partial} u$$

微分形式 $\partial u = \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial z_j} dz_j$ は、(1,0) 型、微分形式 $\bar{\partial} u = \sum_{j=1}^n \frac{\partial u}{\partial \bar{z}_j} d\bar{z}_j$ は、(0,1) 型と呼ばれる。

定義 1.1 (解析的(正則)関数). 関数 $u \in C^1(\Omega)$ は、 du が (1,0) 型のとき、すなわち、 $\bar{\partial} u = 0$ (コーシー・リーマンの方程式) をみたすとき、 Ω において解析的(あるいは正則)であるという。 Ω における解析関数全体の集合を $A(\Omega)$ と書く。

練習問題 1.1.

- $\partial : C^1(\Omega) \rightarrow C(\Omega)_{(1,0)}$, $\bar{\partial} : C^1(\Omega) \rightarrow C(\Omega)_{(0,1)}$ は線形で、関数の積に対する微分の公式を満たすことを示せ。
- $A(\Omega) \subset C^1(\Omega)$ は可換代数をなすことを示せ。

¹ 数学工房 <http://www.sugakukobo.com/>

定義 1.2 (解析写像). 開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^m$ から \mathbb{C}^n への写像 u が、解析写像であるとは、 $u = (u_1, u_2, \dots, u_m)$ とおいたとき、各 $j(1 \leq j \leq m)$ に対して、 $u_j \in A(\Omega)$ が成り立つことである。

練習問題 1.2. u を開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^m$ から \mathbb{C}^n への解析写像とする。開集合 $D \subset \mathbb{C}^n$ から \mathbb{C} への任意の連続関数 v の u による引き戻しを、

$$u^*(v) = v \circ u$$

により定義する。ただし、 $u(\Omega) \subset D$ とする。このとき、 $u^* : C(D) \rightarrow C(\Omega)$ は環準同型になることを示せ。すなわち、

1. $u^*(\lambda v + \mu w) = \lambda u^*(v) + \mu u^*(w)$ for $\forall u, w \in C(D), \forall \lambda, \mu \in \mathbb{C}$

2. u^* により定値写像は定値写像に写される。

3. $u^*(vw)(z) = (u^*(v)u^*(w))(z)$ for $\forall z \in \Omega$

定理 1.1. u を開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^m$ から \mathbb{C}^n への解析写像とする。開集合 $D \subset \mathbb{C}^n$ から \mathbb{C} への任意の連続関数 v が解析的であるとき、 v の u による引き戻し $u^*(v) : \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ は解析的である。

記録 by J.S